

# 日本における小・中・高時代のいじめ被害経験の 長期的影響に関する研究

## —ソーシャルサポートとPTGの関係に着目して—

牟 冬嬋

本研究では、大学生を対象にして、回想法を用いた質問紙調査によって、小学校から高等学校までの間にいじめ被害を経験した子どもたちについて、その当時やその後のソーシャルサポートがPTGにどのように影響を与えるかを検討してきた。

「はじめに」では、日本におけるいじめの問題の背景について紹介し、いじめ問題が家庭、学校、社会にとって深刻な問題であることを確認した上で、いじめ被害者の心身状態に心的外傷後ストレス障害などの長期的な影響を及ぼすことに着目することの重要性を述べた。

まず第1部では、いじめの定義、構造、種類などの内容、現代の日本のいじめの特徴をめぐる先行文献を整理し、いじめ被害者が心身的、心理的に悪影響を受けていることが示唆された。

また、過去のいじめ体験が及ぼす影響には否定的影響ばかりでなく、肯定的影もあることを見出した。いじめ被害経験において、その後ソーシャルサポートによって、PTGが促され傾向がある。PTGとは非常に辛い経験をきっかけとして人間としての成長、その結果とプロセスを指す。いじめの長期的影響についてPTGの研究の観点の有効性とソーシャルサポートに着目することの重要性を述べた。レジリエンスは心的外傷後をポジティブで人間としての成長をもたらす経験へと変化させる能力である。ソーシャルサポートがいじめ被害の苦痛を和らげたり、いじめ被害者の身体的症状を少なくしたりする効果があることが指摘されている。いじめられることによって傷ついたところを以前の状態に復帰・回復させるだけでなく、以前の水準以上に成長するという可能性があることに着目した。

いじめの長期的影響の調査の方法論については、いじめ被害の長期的影響の調査、レジリエンスとの関係、PTGとの関係について、3つの方面の先行研究を検討した。

それを踏まえ、第2部では質問紙調査の結果を考察した。調査の目的は、(1)大学生のいじめ経験傾向、(2)ソーシャルサポートの有効性、(3)いじめ被害経験とPTGの関係、(4)いじめ被害経験とレジリエンスの関係という4点を明らかにすることであった。調査は、2018年11月、東京都内D大学において、100名の教育学系大学生を対

象にした回想法による質問紙を用いて実施した。

質問紙ではいじめの被害経験、加害経験、傍観経験を尋ねた。いじめ被害者に、いじめられた当時、学校生活と体調にどのような影響を与えたか、いじめられた当時、何らかのサポートを受けた経験があったかどうかを問う。また、日本語版外傷後成長尺度拡張版 (PTGI-X-J) を使用して、いじめ被害経験の結果、各質問項目に示される心理的成長がどの程度生じたかを6件法で回答を求めた。大学生用レジリエンス尺度 (RS-S) を使用して、心理的回復力について4件法で回答が求めた。さらに、いじめ加害者に、当時の行為をふりかえって、今の考えについて尋ねた。最後に、いじめ傍観者に、同じ問題の回答を問い、また、いじめ行為を見たり聞いたりしたとき、本人がどのような対処したかについて尋ねた。

第3部では、質問紙回答は基礎集計とクロス集計によって結果を分析した。いじめ被害経験が多い群といじめ被害経験が少ない群はPTGの各因子の平均点は差があり、いじめ被害経験の程度によって、PTGに異なる程度に影響を与えることが見いだされた。男女差については、受けたいじめの方法が違っていることや女性がソーシャルサポートに信頼をおいていることが示唆された。また、ソーシャルサポートを受けた経験について、男性より女性の方が家族と友人に相談することが多いことがわかる。

次に、ソーシャルサポートがPTGに影響していると考察された。いじめ被害の少ない群は多い群に比してPTGの得点が高く、ソーシャルサポート経験も多いことが見いだされ、特に友人や家族によるソーシャルサポートがPTGを導くのではないかと推測された。すなわち、いじめによる心の傷は、周囲の対応などの影響により、マイナスからプラスのものへ変容するのではないかと考察されている。

総じて、本研究は、いじめ研究としては、蓄積の少ないいじめ被害の長期的影響、中でも肯定的側面について光を当てたこと、他方、PTG (外傷後成長) 研究としては、検証されていないいじめによる傷つき経験について取り上げたことに意義があると考えている。また、いじめ被害経験、ソーシャルサポート経験、PTGの連関について一定の傾向を見いだしたことは、教師やカウンセラーへの相談経験の少なさの問題と合わせて、いじめ被害者への周囲のサポートの重要性と、学校としてのサポートの課題を考える上で示唆を与えるものであったといえよう。

他方、本研究の課題としては次のような点があげられる。まず、統計的分析の上で有意差検定や相関係数を利用していない等の弱さがあった。次に、対象とした教育学系大学生においてはいじめ問題への関心が比較的高い予想される積極的意義があるものの、その回答者が日本の大学生を代表するとは言い難いことが指摘される。また、回想法を採用したため、いじめ被害体験に関する項目については、いじめを経験した時点と調査に回答した時点との間に開きがあるため回答者の記憶に全面的に依存しており、客観性に課題を残したさらに、過去のいじめ被害経験が現在どのような意味、価値観を持つ出来事となっているのかなどの点は、自由記述で得たデータを分析に活かす方法があった

が、十分分析しきれなかった。以上のように、本研究の質問紙調査結果の普遍性、信頼性を高めるさらなる調査研究が必要であるといえよう。

引用参考文献：

- 荒木剛. (2002). いじめ被害体験の長期的影響とレジリエンシー (resiliency). *性格心理学研究*, 10(2), pp.108-109.
- 荒木剛. (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について. *パーソナリティ研究*, 14(1), pp.54-68.
- Calhoun, L.G., & Tedeschi, R.G. (2006). *Handbook of posttraumatic growth: Research and practice*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (カルホーンL.G., テデスキR.G. 宅香菜子・清水 研 (監訳) (2014). 心的外傷後成長ハンドブッカー耐え難い体験が人にもたらすもの 医学書院)
- Calhoun, L.G., & Tedeschi, R.G. (2006b). The foundations of Posttraumatic Growth: An Expanded Framework. In Calhoun, L.G. & Tedeschi, R.G. (Eds.), *Handbook of posttraumatic growth: Research and practice*. Lawrence Erlbaum Associates, pp.3-23.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1996). Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression. *Development and psychopathology*, 8(2), pp.367-380.
- Gini, G., Carli, G., & Pozzoli, T. (2009). Social support, peer victimisation, and somatic complaints: A mediational analysis. *Journal of paediatrics and child health*, 45(6), pp.358-363.
- 坂西友秀. (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差. *社会心理学研究*, 11, pp.105-115.
- 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編著. (1990). 新教育学大事典, 第一法規出版株式会社pp.7-109
- 細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編著. (1990). 新教育学大事典, 第一法規出版株式会社p.108
- Janoff-Bulman, R. (2004). Posttraumatic growth: Three explanatory models. *Psychological Inquiry*, 15(1), pp.30-34.
- 菱田一哉, 川畑徹朗, 宋昇勲, 辻本悟史, 今出友紀子, 中村晴信, & 石川哲也. (2011). いじめの影響とレジリエンシー, ソーシャルサポート, ライフスキルとの関係—新潟市内の中学校における質問紙調査の結果より—. *学校保健研究*, 53(2), pp.107-126.
- 平井啓 訳. (2014). 心的外傷後成長ハンドブッカー耐え難い体験が人の心にもたらすもの レジリエンスと心的外傷後成長—回復、レジリエンス、そして再構成 宅香菜子・清水 研 (監訳), 医学書院株式会社 p.57
- 伊藤美奈子. (2017). いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究. *教育心理学研究*, 65(1), pp.26-36.
- 飯村周平. (2016). 心的外傷後成長の考え方——人生の危機とポジティブな心理的変容——. *ストレスマネジメント研究*12(1), pp.54-65.
- 開浩一. (2006). Posttraumatic Growth (外傷後成長) を促すものは何か: 変容過程に視点を置いて. *現代社会学部紀要* 4 卷 1 号, pp.54-84.
- 亀田秀子, & 相良順子. (2010). 過去のいじめ体験が青年期後期においても及ぼす長期的影響—自己成長感を分かつ要因の検討— 聖徳大学児童学研究, 12, pp.13-20.
- 亀田秀子, & 相良順子. (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討—いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討—. *カウンセリング研究*,

44, pp.277-287.

- 香取早苗. (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究. *カウンセリング研究*, 32(1), pp.1-13.
- 菊池武烈. (2009). いじめ (学童期のメンタルヘルス―「生きる力」を育てる確かな基礎づくり) ― (学童期の問題と予防に向けて). *現代のエスプリ*, 503, pp.153-163.
- 清永賢二. (2013). いじめの深層を科学する, ミネルヴァ書房
- 今野喜清・新井郁男・児島邦宏. (2014). 第3版 学校教育辞典, 教育出版, pp.20-21.
- 小山聡子. (2013). いじめ被害体験と援助が自己認知・他者認知に与える影響. (兵庫教育大学2012年度修士論文).
- 小島雅彦, & 井沢功一朗. (2001). 〈資料〉いじめに関する国内諸研究のレビュー: いじめの定義と実態. *上越教育大学心理教育相談研究*, 1(1), pp.111-120.
- 小林剛. (1985). いじめの克服する―教師への期待― 有斐閣
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. (2000). The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child development*, 71(3), pp.543-562.
- Malecki, C. K., Demaray, M. K., & Davidson, L. M. (2008). The relationship among social support, victimization, and student adjustment in a predominantly Latino sample. *Journal of school violence*, 7(4), pp.48-71.
- Matsunaga, M. (2011). Underlying circuits of social support for bullied victims: An appraisal-based perspective on supportive communication and postbullying adjustment. *Human Communication Research*, 37(2), pp.174-206.
- 文部科学省. 平成29年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について, p.23.
- 松浦善満. (2001). 被害者の人間関係 森田洋司 (監修者) いじめの国際比較研究―日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析. 金子書房, pp.113-114.
- 水谷聡秀, & 雨宮俊彦. (2015). 小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響. *教育心理学研究*, 63(2), pp.102-110.
- 森田洋司. (1985). 「いじめ集団の構造に関する社会学的研究」 大阪市立大学社会学研究室.
- 森田洋司. (1990). 家族における私事化現象と傍観者心理. *現代のエスプリ*, p.271, 至文堂, pp.110-118.
- 森田洋司・清永賢二. (1986). いじめ―教室の病― 金子書房
- 森田洋司・清永賢二. (1994). 新訂版いじめ―教室の病― 金子書房
- 森田洋司・清永賢二. (1986). いじめ―教室の病― 金子書房
- 森田洋司, 滝充, 秦政春, 星野周弘, 岩井弥一編著. (1999). 日本のいじめ―予防・対応に生かすデータ集. 金子書房, pp.55
- Olweus, D. (1993). Bullying in schools. *What We Know and What We Can Do*. UK: Blackwell: Oxford: Blackwell (松井・角山・都築訳 (1995). いじめ こうすれば防げる, 川島書店)
- Polk, L. V. (1997). Toward a middle-range theory of resilience. *Advances in Nursing Science*, 19(3), pp.1-13.
- Rigby, K. (1998). The relationship between reported health and involvement in bully/victim problems among male and female secondary schoolchildren. *Journal of Health Psychology*, 3, pp.465-476.
- 齊藤英俊. (2016). いじめ経験時の周囲の関わりといじめ経験の長期的影響との関連性の検討. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, (9), pp.23-30.
- 齊藤和貴, & 岡安孝弘. (2010). 大学生用レジリエンス尺度の作成.
- 安彦忠彦ら編著. (2002). 新版現代学校教育大事典, ぎょうせい, pp.82-83.

- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of traumatic stress, 9*(3), pp.455-471.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). "Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence". *Psychological inquiry, 15*(1), pp.1-18.
- 宅香菜子. (2010). がんサバイバーの Posttraumatic Growth. *腫瘍内科, 5*(2), pp. 211-217.
- 宅香菜子. (2010). 外傷後成長に関する研究—ストレス体験をきっかけとした青年の変容—宅香菜子 (著), 風間書房, pp.232-234.
- 宅香菜子. (2016). PTGとは—20年歴史 宅香菜子 (編著) PTGの可能性と課題, 金子書房 pp.2-7.
- 高橋哲. (2007). いじめによる心の傷とそのケアについて (特集 いじめ・非行と子どもの権利). *子どもの権利研究, (11)*, pp.10-15.
- ファンデンボス, G.R. 原著監修 繁榊算男・四本裕子 監訳者. (2013). APA心理学大辞典, 培風館株式会社, p.931.
- 日本教育社会学会編著. (1986). 新教育社会学辞典, 東洋館出版社, p.22.